
華永伝

めぐたん

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

華永伝

【Nコード】

N2025A

【作者名】

めぐたん

【あらすじ】

仲間を集めるべくラックスは旅立つのですが仲間になったアームは何を考えてるのかわからず・・・。

前文

はるか太古の昔・大神の主は一つの生命球を作り出した。

そしてその生命球の地にそれぞれ守護をする神を生み出した。

天・地・炎・水・光・闇・緑・・・・。

そして生命球に水を育み緑が芽生え・光と闇は時に緑に命をもたらした。

そして大神は地に住む人間を作り人間は生命の地を大切にし大神を讃えた。そして人々が増えるにつれ大神の存在も少しづつ薄れていきいつしかは神々も意見のすれ違いを起こし始めた。それが天と悪である。

天の神々は大地に命を育み・人々を助けた。

しかし・悪は大地の命を奪い・時には人の生命を奪うようになってしまった。

そのせいか神への忠誠を投げ捨て同類の命を奪う者もでてきてしまった。

悪はその者達に力を与え生命球を我が物にしようとした。

それを知った大神は生命球に二つの力を送った。

その力は二人の神となり・一人は生命球を守護をするスノウ。

そしてもう一人はスノウを守るフリータが遣わされた。

荒れ果てた大地にスノウは手を触れるとそこから緑が芽生えふたたび生命球の命は保たれた。

だが・悪はスノウの存在をしり・スノウを殺そうとした。

しかしフリータの手により悪は封印され・悪の力を持つ者は力付き・その後スノウは生命球に残りフリータはエアの星から見えるルセナの星を守護に持ち眠りへと付いた。

大神は生命球エアの他にそれぞれの星を作ると神々に残りの力を与え・どこかの星に眠り（封印）についた。

そして時が経つにつれ人の心に欲望・妬み・憎悪が増え続けまた

悪が生まれる。

その戦いを幾度も繰り返し・スノウは神託の神レピュータを生み出し・未来を予知しながらフリータの力となった。

だが人々が心に闇を持つ限り悪の存在は消えない。

まして少しづつ悪の力が増しているのではないか…。

フリータは不安な予感を感じながらまた眠りへとついた。

そして幾千年の月日が流れ新たな戦いが始まる。

第一章（前書き）

同じ文章が繰り返し返りましたので訂正させていただきます。申し訳ありませんでした。泣

第一章

惑星の星々を守る青き星ルセナ。

その星の中心にクリスタルの結晶が光り輝く。

その中には一人の少女が目をつぶり眠り続けている。

少女の名はフリユータ。

青き星ルセナを守護する者。

(感じる。闇の力が…。目覚めてはならない者の力が…。)

漆黒のベールを纏った者がフリユータに近付いていく。

「フリユータ。」

その声はフリユータにとって忘れられない声。忘れられない者だった。

フリユータの表情は険しくなりその者の名を呼んだ。

「ナシユータ！なぜここに…。なぜ目覚めたのだ!!」

クリスタルが突然青白く光を放つ。ナシユータの口元はほほ笑み。

「…美しいフリユータよ。お前に予知をしよう。必ずお前を手に入れて見せる」

「……………」

無言のフリユータにナシユータはささやく。

「フリユータ。お前は人々に疑問を抱いている。私と同じ…」

「闇の者と同じ？」

ナシユータはベールを脱ぐと

「まあ。いい。近いうちにまた会おう。フリユータよ。だがこれだけは忘れるな…お前は私のもの…他のだれにも渡さない。」

ナシユータはフリユータのそばから消えていった。

(やつの封印が解けてしまった。エアの星が危ない…。時が来た。もうすぐ来る。私の目覚めの時が…。) 青く長い髪が空中を漂いクリスタルの光が放たれた。

「はあ。はあ。」

薄暗い街の路地裏で一人の青年が走っていた。

「はあ。はあ。 なっ何で。。。私が。。。 殺される羽目に。。。なるんでしょうか。」

青年の背後からは何人かの男は追いかけてくる。

青年は時々、振り返りながら、

「何で?? しつこいですねー。」

青年はわけがわからないままただ走り続けた。

そして青年は路地を曲がると呆然としてしまった。

「あー。行き止まりですか。」

青年はキョロキョロと逃げ場を探すが時はすでに遅く、後ろには黒ずくめの男たちが道をふさいで立ち尽くす。青年は一步一步後ろへと下がるが壁に肩が当たった。もう後がない。逃げ場を失った青年は剣を抜く姿勢をとり黒ずくめに向かつて、

「なぜ私を狙うのです。お金ですか?なら無一文ですよ。」

黒ずくめの男たちは答えることなく剣を抜き構える。

「お金じゃないというと。」

青年は考えた。自分を殺して何の得があるのかと。。。

黒ずくめの男たちは少しづつ近づいてくる。

「あー!。どうせ殺すんなら、殺される理由くらい教えてもらえませんか? このままじゃあ、死んでも死に切れないですよ。」

「。。。。。」

青年の質問に答えることなく一歩また一歩とじりじりと近づいてくる。

「答える気なしですか。。。じゃあ簡単に殺されるわけにはいきませんね。」

青年は剣を抜き構える。そして黒ずくめの男たちは青年に切りかかってくる。青年は上空に舞い上がると人差し指と中指を突き出し剣にあて、

「散れ、蓮空の刃!!」

青年の剣が光り輝くといくつもの刃に変わり男たちの体に向かってその体を貫いた。

辺り一面煙が覆い、煙が消え失せた後、青年一人が路地に立っていた。

青年は剣を納め、

「まったく無駄なことを……。でもやっぱり何で私が……。うーんっと考えるがやはり殺される覚えがない。

青年は路地を見上げ、

「教えてもらえないでしょうか。私が狙われた理由。」
見上げる路地の上に一人の影が現れた。

その者はふつと路地から飛び降り青年の前に着地した。長い髪を一つに束ね、上半身を起こし髪を後ろの振り払うその者は男か女かわからなかった。

その者の顔は美しくまるで妖かしにも似た雰囲気を感じた。その者は照れ笑いをしながら、

「ばれちゃったか。でも俺は敵じゃないから安心していいよ。」

「……。」

青年はじーつと判別のわからない者を見続けるので

「どうした??信用できないか??」

「いいえ。敵じゃないことはわかっています。あなたからは殺気を感じない。むしろ私を助けようと追ったのでしょうか。でも……。」

判別のわからない者は驚いた表情をして、

「こりゃあ驚いた。そこまで気付いてたんだ。すごいな。でも俺の助けなんて不要だったんだけどね。で?でもって?」

「……。」

「?どうした??」

青年はじつと見て、

「あなたは女ですか?それとも男ですか?」

「……。」

青年は照れ笑いをしながら

「あつすみません。失礼なことを。」

「ぷっははは」

「？」

判別のつかない者は腹を押さえながら

「何、真面目な顔して見てると思ったらそんなこと。ははははは」

「だって……男にしてはきれいな方だなっつと」

「くすくす。俺は男のつもりだよ。おもしろい人だな。俺はラック
ス。君は？」

「私……ですか。アーム。サウンド＝アームといいます。」

「君がアーム!!」

ラックスはアームの手をとり

「見つけた!」

「はい？」

アームは訳が解らず、

「アーム。俺たちに力を貸して欲しい。」

「？」

アームは手を離し、

「なぜ、私なのです。」

「……なにが??」

ガクッ。

アームはラックスに向けて手を伸ばし、

「つかまって、さっきのやつらの仲間でしょう。近づいてきます。」

「あっああ。」

ラックスはアームの手を取るとスッと路地の裏から二人の姿は消えたのだった。

さっきまで立っていた場所に黒ずくめの男達が集まるその中で一人の男が路地の道に立ち

「……ここでやつらの気配が消えている。逃げられたか。」

男はベールに体全体に包んでおり顔が見えなかった。

男は黒ずくめの者達を睨み、

「お前達の仲間をやつを負った者はどこに行つたのだ。」

「……。」

男はベールを振り払い、

「そうだった。お前たちは心のない人形だったな。」

聞いた私が馬鹿だった。」

男は路地の黒い布切れを見つけると

針を投げ刺すと、

「どうやら、お前達の仲間は粉々になつたみたいだ。ならばこいつ

に聞くか。」

男は手を振りかざすと、

「望むとしよう……。魂鎮玉。」

シューッ

布切れに刺さっている針から煙が出てくると徐々にそれは人の形へと変わる。

そして煙が消えるとそこにはアームの手によって死んだはずの男が立っていた。

男は呆然としたままで、ベールに包まれた男は手をかざし額に手を当てると、

「答えよ。やつはどこだ。」

「……わかりません。」

「お前はやつに指一本触れることができなかったのか。」

「……はい。」

「……そうか。お前はやつに傷一つつけられることなく死んだのだな。」

「……はい。」

男は額から手を放すと後ろに振り返ると歩き出した。

生き返つた男も後に続くようについて行くこととするがベールに包まれた男は歩きながら一言、

「役立たずが。」

ビジュ

ポトポトポトツ

生き返った男は、何か鋭い刃物で切られたように肉の塊となって落ちていった。

「あーあ。せつかく生き返らせたのに。アレクったら勿体ないの。」

「・・・シヤンか。」

アレク先ほど始末した男の肉の塊の方を見るとそこに幼き少女シヤンが立っていた。

シヤンはチリンツと鈴を鳴らしながら男の切り落ちた頭部を拾い、

「あら、この人まだ若いじゃない。どうせなら年寄りにしてよ。」

シヤンはポトツと首を捨てるとアレクの方に近付き、

「アームって子。勘が鋭いのね。」

「なぜわかる。」

「・・・なんとなくよ。なんとなく。女の勘ってやつ。」

シヤンは長い髪を振り払い人束の髪をいじりだすと

「ねえ、アレク。」

「なんだ。」

「こいつら殺しちゃだめ??」

シヤンの後ろにいた黒ずくめの男達は宙に浮いていた。それはシヤンの髪が黒ずくめの首に縛りつき吊るしているのだった。男達は苦しみがくが無駄な抵抗に過ぎなかった。

「ふふふ。無駄よ。もがけばもがくほど私の髪はお前らの首に食い込む。いくら心のない人形でも苦しいだろう。」

アレクは無表情でその様子を見ていた。

「ねえ・・・アレク。だめ?」

アレクはため息を出し、

「好きにしる。」

「やった。」

シヤンは愛くるしい顔に瞳をパッチリさせながら喜ぶがその背後で

はシャンには似使わない男達の苦しむ光景があった。

「隠してても知ってるんだから、お前達はフージニーの命により私達を監視していること。」

「ぐはっ。」

一人の男が血を吐き出す。

「これだけ言っておくわ。私達はシーザーに仕えているのではない。ナシユータ様に仕えているのだ。」

シヤンの瞳が赤々となっていていき声も低くなっていく。
恐ろしい声へと、

「お前らの様な姑息な手を使うようなことがまたあれば、フージニー、お前をこの私が^{エンシェント}円紫炎斗のシャンが殺す。」

ブシユツ

ドサドサドサツ

シヤンの髪が男達の体を潰し切り落とした。

シヤンの漆黒の髪に血がべっとりついてしまったがより髪がきれいに見えた。

「・・・アレク。」

「なんだ。」

「私達も舐められたものね。」

「・・・。」

「まあ・・・いいわ。」

シヤンはアレクの目の前に歩き止り、アレクを見つめ

「ナシユータ様からの命よ。あいつらはやつらに任せましょ。」

「・・・。」

シヤンの言葉にアレクは納得いかない様子にシヤンは

「アレク・・・あなたの気持ちもわからないこともないわ。でもね。どうせならもつと強い者と戦いたいでしょ。」

シヤンはアレクの首に手を回し、

「ちょっと見物しましょうよ。やつらに倒されるんなら大したやつじゃないわ。無駄な体力を使うのは賛成できないわね。」

「・・・わかった。」

「本当！よかった。だから大好きよ。アレクつて。」

「・・・早く戻るぞ。」

「はい。」

そして残った路地裏には大量の死体が残っていた。

広い広い草原の中
スツ

「すごいな。瞬間移動ができるんだな。」

アームはラックスの方を見て

「でっとうして私なんですか？」

アームの質問にラックスは思い出し、

「ああつ。神託だよ。」

「神託・・・？」

「そう、レピュータ様が神託したんだ。アーム、君が私達の大きな力となることを。フリーュータ様の力になると。」

アームは訳がわからず

「すいませんが、私にはよく・・・。」

ラックスは座り込み。

「んー。そうだな、まず詳しく話すからアームも座れよ。」

「はあ。」

アームはラックスの隣へ座るとラックスは長々と話し出した。

「俺の国は世界で一番大きく進展も早い都市国だった。国の名はユークリステイ。王も国民には優しく国の民達も平和に過ごしていた。

そんな時、外部からシーザーという魔術師が現れた。シーザーは体中、傷だらけの女性で王はどこの誰かしらない者を疑いもせず看護したんだ。今、思えばどことなく亡き王妃ににていたのかもしれない。ちょうど王妃は3年前森に迷い込みずっと見つからない。

民達も森の魔物に食われたのではないかと噂を流すようになり・・・だからこそ、王はシーザーをいたわったのだ。そして、とうとう王はシーザーを王妃に迎えた。もちろん民達も反対はしなかった。王が幸せならよかったんだ。」

「・・・。」
アームは悲しい顔をしたラックスを見つめていた。ラックスは少しずつ顔を上げ重苦しくまた話し続ける。

「それを。あいつはやつは・・・。シーザーを王妃に迎えてしばらくだ・・・豊かだった大自然も澄んだ水も涸れてしまいすぐに食料も尽きてしまった。俺は何かおかしいと思ったんだ。あれだけ大自然に恵まれているこの土地がこんなに早く涸れていくのはおかしい。王に取り次いで話をしたが・・・無駄だった。」
ラックスは立ち上がり、

「日が経つにつれ民達が次々に食料を求め争う者もいれば王宮に食べ物を求める者もいたが王は取り次ごととはしなかった。私は荒れ果てていく祖国の原因を視眼球で調べたんだ。」

「・・・。」
「もしたらなぜか王妃の姿が映りだし、失敗したのかと思って解こうとしたんだ。したら、鏡に映った王妃の顔は見るもおぞましい老女の姿だったのだ。そいつはべらべらと話していたよ。王はまぬけだ、だから簡単に術にはまってくれた。そして鏡に民達の苦しむ姿を映し楽しんでた。拳句の果てには民の一人を・・・。」
「・・・。」
ラックスは手を握り締め続ける。

「俺は急いで民達に知っているすべてのことを話した。多くの民は俺の言うことを信じてくれた。だが、このことが王妃にばれ、俺達を捕まえようと兵の軍を出してきた。民と軍・・・はつきりいつて強さでは負ける。逃げるしかなかった。なんとか隠れ道で逃げられたが国にはシールドがはられ中には2度と入ることはできなかった。後から聞いたんだ。祖国だったユークリステイの名は今となって十

夜国になつたんだ……。」「

アームは腕を組み、

「十夜国……。風のうわさで十夜国で黒魔術をしているとか……。」「

「ああ。どうやらレピュータ様が言うにはシーザーは黒魔術で黒龍を呼び出そうとしているらしんだ。残りの民達が危ない。」「

少しアームは考え込み、

「黒龍は地の神の神龍。その神龍を呼び出すのですか。怖いもの知らずですね。」「

「……。黒龍。またの名を世界を死に導く神龍。もし、神龍を呼び出しでもしたら……。」「

アームはため息をつき、

「この世界は一瞬にして破滅しますね。」「

「……。そしてその黒龍の力をシーザーは手に入れるつもりだ。

その力で自分の築く世界を作り上げるため国の民達は黒龍の生贄に……。」「

ラックスは手を握り締め、今も目を瞑れば浮かぶ幸せだったあの頃。どうして私達の国が、どうして気が付かなかったのか……。

（「いつか……つが救い出してくれることを……私達はお待ちしています。……様。」「）

「くそっ!!!!」「

ドンッ!!!!

ラックスは木に自分の手を殴りつける。

「俺が……。俺がもつと」「

ドンッドンッドンッ!!!!!!

何度も何度も自分を責め続けるラックスの手をそつとアームの手が止める。

「あまり自分自身を傷つけてはいけません。」「

ラックスは手を振り払い、

「これくらい平気だ。国の民達の苦しみに比べたら……。」「

「……。」

ラックスは、はつとさせ、

「すまない。つい感情的になってしまい。大したことはないよ。これくらい……。」

「……。」

「十夜国に家族を奪われ、殺され……そしてこれ以上自分と同じ思いをさせてほしくない。この世界を元に戻そうとしているのが神授^{アン}国。アームが狙われたのも十夜国にとって邪魔な存在だったんだろ
うな。」

「……？」

「いったらう。レピュータ様が神託したと。」

「ああ。そうですか。」

「たぶん。アームが狙ってきたやつらは帝国の配下だと思うよ。」

「……。」

アームは後ろに向き、草原に置いてある荷物を持つと

「詳しいご説明ありがとうございます。」

そういうとアームはラックスから離れようと歩き出す。ラックスはアームの前に飛び出て、

「ちよつと待て。俺達の仲間になってくれないのか？」

アームは優しい微笑で

「すみませんが私は何かと忙しい身で。」

「また狙われるぞ。」

「安心してください。自分の身は自分で守れますから。」

アームはラックスを抜かし歩き続ける。

「待ってくれ!!。」

ラックスはアームの前に行き両手を広げ

「あきらめが悪いですね……。」

「当たり前だ!!……今……今俺があきらめたら……誰がこの世界を救ってくれるんだ!!たしかに俺がいても力の差は変わらな
いと思う。だがな。こんな俺を信じて待っててくれる人もいるんだ。」

そう簡単にあきらめてたまるか!!。」

「・・・信じて・・・ですか。」

アームの瞳が藍からいっそうより藍に深まり冷たい冷酷な雰囲気
を漂わせる。ラックスはアームと目が合い背筋からゾツとする様な感
覚がした瞬間、一瞬の出来事だった。ラックスの横を素早い風が通
ったかぐらい早く、ラックスの目の前にいたアームが消えてしまっ
た。そして背後の気配にラックスは気付き振り返ると

カチャツ

アームの剣がラックスの喉に当てられていた。

「くっ!!」

アームはくすつと笑うと

「例え、あなたの命を失うことになってもですか。」

アームの声が一段と低く聞こえる。ラックスはただ呆然としたまま
黙っていた。アームは剣をしまい先へと歩き出す。ラックスはうつ
むく。

「・・・。」

アームは歩きながら

(「こんな・・・ものか・・・」)

「・・・た。」

「ん?」

ラックスの呟く言葉にアームは立ち止まった。

「俺を・・・俺を助けるために・・・。」

俺を信じてくれた民達、シーザーの配下に追われ、追い詰められ民
達は戦った。

一人また一人死んでいく中、

(「・・・様。あなた一人だけでもお逃げ下さい。」)

民達の半分は俺を庇ってあの帝国の中に今もいる。

(「・・・いつか・・・様が救い出してくれる日を私達はお待ちしてい
ます。」)

なぜ人は争うのか。奪い合い殺し合い幾度も幾千も。今も脳裏に浮

かぶ民達の声。

「もう・・もう人々が争うのは見たくないんだ。この世界を帝国から救うことも目的だ。だが、俺の一番の願いは・・・望みは戦いのない世界にすること・・・。」

この世界を実現させるためならこの命失ってもかまわない。」

アームは振り返りラックスの姿を見ながら

「私が仲間にならなかつたら？」

ラックスはアームの目をまっすぐ見、

「なつてくれるまでどこまでもついて行く。」

アームはラックスの言葉に下を向く。

(まっすぐな心・・・か)

アームはがばつと上を向き、

「ははははは。」

急に笑い出しラックスは呆然とする。ラックスは少し赤くなりながら、

「人が真剣に言っているって言うのに・・・。」

「ははは・・すみませんね。くくっわかりました。」

ラックスはそんなアームの様子によくわからず困った顔をさせ、アームはラックスの頭をなでながら

「あなたはかわいいですね。」

カアーツ

ラックスの顔は赤く染まっっていく。そんな表情をアームは楽しみながら

「条件があります。なんでも私のゆうことを聞いてくれるなら仲間になりましょう。」

アームの条件にラックスは考え、

「難しいことか??」

アームはニコニコしながら、

「いいえ、簡単ですよ。だめならこの話はなかつたことに。」

「あー!!!わかつた!!!」

いこうとするアームの荷物を引っ張りラックスはあわてる。

「あとでなしはだめですよ。」

「約束は約束だ。」

「交渉成立ですね。」

アームの笑みになにかいやな予感がするラックスだったが仲間になるという喜びからその考えはどこかに消えてしまった。

第二章（前書き）

遅くなりました 申し訳ございません。

どうかとのせていただきありがとうございますので朗読のほうよろしくお願いいたします

第二章

惑星の星々を守護する青き星ルセナが見える生命球エア。深き森林、人々は迷いの森という。その中に白い宮殿が霧に隠されて守り続けられている。

その宮殿の最上階に一人の女性がルセナの星を見上げていた。女性の名はレピュータ。未来を予知し信託する者。

レピュータの近くには炎のように赤い髪にアイスブルーの瞳を持つ男が仕えていた。

男の名をカイン。

「目覚める……。我らを運命の道へと導く。ルセナの守護をもつ、フリータ様が……。」

もうじき……。神水に下りられる。」

カインはレピュータの様子に異変を感じる。

「レピュータ様。どうかなされましたか。」

「……。私の……。神託の……。間違いだとよいのですが……。帝国の者は……。黒龍を目覚めさせることが目的なのでしょうか……。」

カインは考え込み、

「と……。いいますと?。」

レピュータは深刻な顔付きになり、

「ルセナの守護とするフリータ様は何年……。何百年……。何千年経とうともそのお姿は変わることなくこの惑星全体を見守り続けています。悪の力がない限り……。つまり、時が来るまでフリータ様は目覚めることがない……。はずなのです。」

「……。黒竜が目覚めようとしているからでは?。」

「……。私も最初はそう思いました。でも……。何か……。何か不吉な予感がするのです。」

「不吉……。?。」

レピュータは神具（杖）を抱きしめ、

「大きな魔の力が……。黒龍ではなく……なにかを感じるのです。少しずつ……少しずつ……着実に、近づいてきている。」

レピュータは目を瞑り神具を握り締め、

「見えない……。魔の力が大きすぎます……。」

「レピュータ様……。」

倒れそうだったレピュータをカインが駆け寄り支える。

「御無理をはいけません。力を使う度、レピュータ様のお体が……。」

レピュータはカインの腕に掴まり、

「私は大丈夫です。それより……神水の間へ……。フリータ様が下りになりましたから……。」

「……はい。」

レピュータはカインの腕を放し、神水の間へと歩き出し、その後ろにカインがつづいた。

長い長い道を歩き続けると少しずつ力の波動をカインは感じ取った。

（この力は……。）

カインは力の大きさに驚く。

やがて白い門がレピュータたちの前に現れる。レピュータは白い門の目の前で神具をかざすと神具は光り輝き白い門は音を立てて開き出した。

白い門を通ると中は青白く輝いていた。

「これは……いつたい。」

レピュータは光の中へ歩き出す。

「この輝きがフリータ様の力の結晶なのです。悪しき闇の力と対抗できる力……。」

レピュータとカインは光の源へと進む。進む先には光の塊が宙に浮いていた。レピュータの神具は光り出し、ひとつの青い光が光の中心を指すと光の洪水は収まり、巨大なクリスタルが見えてきた。その中には一人の少女が眠っていた。

「これがルセナの神官。ルセナの守護をもつ……。この少女が・」

レピュータは薄笑いをしながら、

「たしかに見た目は少女ですが、これでも千年は年上ですよ。フリュータ様は。」

「本当ですか？」

カインはクリスタルに眠る少女を見渡す。

「どっから見てもきれいな少女に見えるんですが……。」

「そうですね……。ですが、彼女の今のこの時が力の最大な時なのです。フリュータ様は力を使い、ご自分の体の時間をとめています。力が少しでも衰えれば悪を倒すことができなくなる。だから、これは……。仕方がないのです。私達の運命だから……。」

「……。申し訳ありません。」

レピュータはカインの方を向き、

「構いませんよ。」

と答えるとフリュータの額の紋章を見ながら目を閉じ神具をかざし、呪文を解く。

「地に降り立ちルセナの神官、フリュータよ。古より目覚めたまえ。珍坤昇。」

神具とクリスタルが共鳴し合い光り輝く、そして光の渦にカインは目を瞑る。

光の洪水は宮殿全体にも渡り上空へと解き放った。

しばらくして、光が少しづつ収まりカインが瞼を開けると一人の少女が宙に浮いていた。

白い神服に包まれ、額の紋章は消えていた。青く長いストレートの髪が肩にかかり地に降りた。

「私はルセナの神官。ルセナの守護をもつ者。」

カインはフリュータの姿に見とれていた。クリスタルの中だったからか、実際クリスタルの外から見てみると、人とは思えないくらい美しくきれいだったのだから。

「お久しぶりです。フリユータ様。」

「その声はレピユータですか。」

フリユータはレピユータの方を向く。

「はい。」

レピユータの姿を確認するとフリユータは天上を見上げた。

ここは最上階というのもあって青く澄んだ夜の星が見渡せる。

「スノウの力が感じられない。私が以前来た時は、溢れんばかりに感じられたのですが……。スノウは……。」

レピユータは首を横に振り、そして悲しい表情をしながら、

「申し訳ありません。神託である私が……。」

「……。」

そんなレピユータを見てカインが代わりに答えた。

「スノウ様は……行方がわかりません。だからといってレピユータ様を責めないください。どうしてもというなら私が代わりに受けます。」

「……。」

「カイン……。」

フリユータはカインの瞳を見てレピユータのそばに近づく。

「レピユータ様。」

カインは心配な顔付きで見る彼にレピユータは微笑む。

フリユータはレピユータに触れ、

「スノウ様の力が弱まったことに気づいたときには……。もうスノウ様はいませんでした。行方を捜したのですが……。」

「スノウの身に何か……。」

「……おそらく。」

レピユータはひざを地面につけ、神具を握り締める。レピユータの体から手を離し、

「自分を責めてはなりません。あなたはよくやってくれました。目を閉じなさい。」

「……はい。」

レピュータは言う通りに目を瞑る。そしてフリータはレピュータの額に手をかざす。

「青き星……ルセナの力を。」

暖かい光がフリータを包む。そして、レピュータの体を少しずつ包み込んだ。

カインは立ち上がり何がどうなっているか見えなかった。

だが自分の体に入ってくることを感じた。

やがて、二人の姿がカインの目に映る。フリータはレピュータから手を下げるとレピュータは瞼を開けた。

「……なぜ……私は早く気づかなかったのか……。迷惑を掛けました。」

「いいえ。フリータ様。」

フリータは天を見上げ、

「あまり無理をしてはいけません。レピュータ。」

「私は無理など……。」

「……。」

「……申し訳ありません。」

「レピュータ。あなたの力は十分に役に立っています。それはスノウも同じです。あなたが倒れては多くの人が悲しみます。ここからは私の役目です。」

「……はい。」

「私はスノウに会わなければなりません。先を急ぎます。」

フリータはレピュータを抱き締め、

「私の目覚めを手伝ってくれてありがとう。永い間、私は眠り過ぎたようです。自分の力が……弱っていることに気づかなかった……。何者かが私の力を奪っている。」

「!!!!!!?」

フリータはレピュータから離れ宙に浮く。

「レピュータよ。その者は……。」

フリータの視線にカインは気づきお辞儀をすると、

「私は真空道、紗蘭尊の一番弟子、カインと申します。」

「真空道……。紗蘭尊……。」

フリータはカインを見渡すと微笑む。それを見たカインは顔を赤らめた。

「紗蘭尊か……。あいつは私の友だ……。今あいつは？」

カインはうつむき、

「師範代は……。」

カインの様子にフリータの表情は曇る。

「……わかった。」

フリータは上空へと舞い上がる。

「私はスノウに会わなければなりません。レピュータ。そしてカイン。心の優しい者よ。悪しき闇が蘇ろうとしています。」

「黒龍ですか……？」

カインの言葉にフリータは首を振る。

「いいえ。黒龍は世界の破滅の道へと誘う一つのかぎにすぎません。早くとめなければ……。」

それでは、わたしはいきます。心の優しいカインよ。邪な心に惑わされないで……。過去を振り返ればずっと先へは進めないのだから……。」

そう言うとフリータは宙高く舞い上がり消えていった。カインはフリータの言葉に呆然とする。

「カイン。」

「あつ……。すみません。」

カインはレピュータの側へ駆け寄り体を支えようとするがレピュータはそれを止める。

「私は大丈夫です。」

「しかし、封印を解く時また力を……。」

「フリータ様が力を与えてくれました。」

カインはフリータの行動を思い出した。

「まさか……。あの暖かい光は。」

レピュータはコクリと頷く。

「フリータ様はそういうお方なのです。私よりも自分の力が一番弱まっているというのに……。」

レピュータは座り込み、

「今のフリータ様では……。」

レピュータの言いたいことはすぐにわかった。カインは口を開く。

「私は勘違いをしていました。人々が苦しんでいるのになぜ眠り続けているのか……。疑問ばかり抱いて……。」

レピュータは微笑み、

「フリータ様はあなたの心をわかっています。」

「そうでしょうか……。」

「一目でわかります。」

レピュータは立ち上がり歩き出す。

「カイン。」

「はい。」

「あなたはフリータ様の力になりたいですか。」

「……昔は憎んでいました。でも決めました。あの力の感覚に。」

レピュータは立ち止まる。

「ならばお行きなさい。」

「……ですがレピュータ様を。」

「私は未来を予知する者。ここを動くことは許されません。式をもつカインよ。」

「はい。」

「あなたはここにいてはいけません。あなたの力は民を救う力。今、あなたの力となる者。」

フリータ様の力となるラックスが仲間にしたみたいですよ。カインよ。あなたはラックスと合流しラックスの力となってください。」

「……。」

カインはだまつたまま下を向いていた。レピュータはカインの頬に

触れ、

「カイン……。こうしている間も人々は一人また一人と失っています。迷う暇などありません。私なら大丈夫です。それに……。ラックスのことがずっと気がかりだったでしょう。」

「なっ！！そんなことはありません！！」

カインの焦る様子にレピュータは微笑む。カインはため息を出すと

「必ず戻ります。だから無理をなされなくてください。」

と一言言うところから旅発つことを決めたのだった。

第三章

大都市十夜帝国、外はシールドが張られ外部の出入りができないようになっている。

帝国の中には6人の使い魔とその主であるシーザーが佇んでいた。6人の使い魔は漆黒のベールに包まれていて男か女かの区別がつかなかった。シーザーだけは階段を登り、中央にある大鏡に向かい語りかける。

「もうすぐだ。もうすぐでわらわの願いは叶えられる。」
大鏡に映っていた姿はやはり年老いた醜い老婆の姿だった。

「ああ……。憎い、憎いぞ……。永遠に美しい姿ではやはりいられないだろうな……。人間なら……。」
自分の姿を憎みながらシーザーは言い続ける。

「しかし、力を手に入れれば永遠の命……。永遠の美しさを手に入る。ふふふふ。」

鏡から離れ、シーザーは使い魔達に叫ぶ。

「お前達よ。もうじき……。もうじき、わらわの願いは叶えられようとしている。」

シーザーの声が響き渡る中、それを打ち消すかのように、

「それはどうでしょか。」

「!？」

その声にシーザーは使い魔の後ろから聞こえた声の主を見た。

6人の使い魔の後ろからは一人の女性とも男性とも似つかない圧倒的な美貌の持ち主がシーザーに近づく。ベールを払う素振りや歩き方、雰囲気などから高貴な者かと思うくらいなにもかもが備わっていた。その者の存在はひと際目立ちその微笑みは一目見るとその者を虜にしてしまうくらい魅力的な微笑だった。

「お久しぶりです。母上。」

シーザーはその者の姿に喜ぶ。

「おお、ナシユータ。我が子よ。」

そしてナシユータの肩を抱き、

「いつ封印が解けたのだ。」

シーザーの問いにナシユータは口を開く。

「母上……。解けたではありません。自らの手で解いたので
す。」

「解いた……？だがあれから何百年経つのだろうか……。
お主を封印されわらは悲しかったぞ。だが、どうやって解いたの
だ。あの封印を……。」

ナシユータは懐から水晶を取り出す。

「……フリユータのおかげ……とでもいつときましよう。そ
れより母上。」

「なんだ。」

ナシユータは使い魔を見ながら、

「私が出る幕はないようですね。」

その言葉にシーザーは甲高い声で笑い上げた。

「まあそういうでない。ところでどうということだ。今の言葉。」

ナシユータは手の中にある水晶を見ると水晶は黒く輝き出しながら
フリユータを映し出した。それを見たシーザーは忌々しい顔付きに
なり、

「こいつは青き星の神官。ルセナの守護をもつフリユータ。覚えて
おるぞ。わらわを封印した忌々しいやつではないか。こいつが目覚
めおったか。」

シーザーは再び大鏡に向かい、

「おお、闇の魔王よ。やつを貫く力を……。このままでは同じこ
との繰り返しに……。」

「母上……。」

「……なんじゃ。」

「私にフリユータのことを任せてもらいたいのですよ。」
「……。」

ナシユータは黒く輝く水晶の中から一つの黒く光り輝くクリスタルを取り出し、シーザーに手渡した。シーザーは黒のクリスタルを見渡しながら喜びに満ちた。

「これは……。」

「光に打ち勝つ力ですよ。母上。問題はこれをどこから持って来たのか……。おわかりですか？」

「まさか……。」

ナシユータは不敵な笑みを浮かべ、

「フリユータを私に……。任せてもらえますね。」

辺り一面が静まり返る中、使い魔の一人フージニーがナシユータに向けて反論する。

「何を言うのかと思えば……。情が移りましたか。ナシユータ殿。」

それに続くかのようにフージニーの後ろにいたランジエが加わる。

「封印された年月が長くて頭がおかしくなったんじゃない。」

その言葉を聞き反対側にいたディーゼが、

「言葉を慎みなさい。ナシユータ様を侮辱する者はだれであろうが私が……。」

ディーゼは腰に提げている剣に手を触れる。それを見たランジエは、
「怖い、怖い。さすが、ナシユータに忠誠を誓った女だこと。でもね、これだけは教えてあげる。いくらナシユータのそばにいたって振り向かないわよ。ディーゼ。」

ディーゼは剣を抜き、

「その減らず口、すぐにきつてくれるわ!!!」
「ガンッ!!!」

ディーゼとランジエの間に雷打が落ちた。

「やめるんだ。」

ディーゼは後ろに控えていたサーヌが二人に入り、

「そうはいかない。二人ともシーザー様の御前だ。立場をわきまえる。」

デューゼは反論できず、剣を仕舞い後ろへ下がる。サー又はナシュータを見上げるとデューゼの後ろに続きさがっていった。

「ちっ、あいかわらず嫌な女だね。」

「ランジエ……。そういうな。」

フージニーはランジエの怒りを宥めていた。ランジエはベールを振り払い、

「ナシュータもナシュータよ。なんで私達にフリュータを任せないわけ？」

フージニーは考え込み、

「……。そうだな。だが私はシーザー様の命で動く。今言えることはこのくらいだ。」

「……。まあ、いいわ。あなたらしい意見ね。」

使い魔達はそれぞれの疑問を持ちながらも心の中に収め、シーザーの反応（答え）を待つ。

辺りが静かな中、シーザーは黒のクリスタルを見ながらくすくす笑う。

「よかるう。ナシュータよ。フリュータはお主に任せよう。」

「ありがとうございます。母上。」

シーザーは自分の姿を大鏡で見ながら、

「ナシュータ……。我が闇の子よ。わらわは美しいか。」

その問いにナシュータはシーザーに近づき、地面に片ひざをつけシーザーの手をとり、口付けをしながら答える。

「はい……。とても。」

その答えにシーザーの口元は微笑み、6人の使い魔に向かって、

「炎撃のシュウ。水迅のシュロ。大地のフージニー。雷光のサーヌ。風軋のランジエ。縁戒のデューゼよ。」

「はっ！！！！」

6人が全員声をそろえて地面に膝をついて一礼する。

「お前たちにはやってほしいことがある。」

そしてついに始まる。運命の歯車が回る時。神と悪が戦うとき。世

界は生死を彷徨い答えを見つける。それが生きる者にとって良い事か悪い事なのかは定かではない。

第四章

見渡す限り山、川、森。そして雲ひとつない大空。アームは大自然の中、背伸びをしながらすがすがしい気分を満喫していた。

「んー。やっぱり気持ちいいですね。大自然の中は……。」
がしっ

アームの肩をつかみ、息を荒くしたラックスの姿がそこにはあった。「なっなんで……ぜはあぜはあ……お前は……はあ……疲れないんだ？」

アームはラックスに向け微笑をする。

「そりゃあ、若さでしょう。」

その答えにラックスはむかっとなぜ、

「俺はお前よりも一応若いんだけど。」

少し怒りぎみのラックスの言葉にアームはあごに手を置き考え込む。

「じゃあ……運動不足じゃないですか？」

「はあ。」

そうなのだろうか。ラックスは自分自身が情けなくなり座りこんでしまった。そして、ふとアームの足元を見ると、かすかに宙に浮いていたのだ。

ラックスはアームの足を持ち上げながら立つとアームはドテツと音を立てて尻餅をついた。

「いたたたたたた……急になにをするんです。」

「なにが、急に何するんですっだ！！アーム！！お前、俺が一生懸命、山道を歩いていたのにまさか……ずっと浮いて楽しんでたんじやないだろうな。」

アームは苦笑いしながら顔が少しづつ引きつり笑いになっていた。

「はははは……ばれちゃいました？」

「ばれちゃいましたかじゃねーよ。道理でいつまで経っても疲れが見えないわけだ。自分だけ楽しんでたんだな。」

ラックスがすねだしたことにアームはなだめながら、

「わかりましたよ。ラックスにもやってあげますから、そんな目で見ないでください。ね？」

アームはラックスの足に手を触れようとしたときラックスはアームから離れた。

「？」

「いい。」

「はい？」

ラックスは草原の方に歩き出し、

「俺は自分の足で歩くから別にいいよ。」

そしてラックスは草原に寝そべる。ラックスの行動にアームは薄笑いを浮かべた。

「自分の足で……ですか。」

フツ……ストーン。

アームは地に足をつけた。そしてラックスの側に座り込み青空を見上げていた。

「怒らせたようで申し訳ありません。」

アームの言葉にラックスは頬を赤らめながら、

「俺こそ……きつくいいすぎた。それに……。」

「それに？」

二人はここ二日間歩きっぱなしな上ぐつすりとも眠ることもできなかった。眠っている間になにかあるんじゃないかと警戒をして。それでもアームの体調は疲れる様子もなく、ここで自分がへこたれてはと、妙なライバル心を勝手に起こしていたのだ。宙にういていることなど今の今まで気づかなかった。がんばっていた自分がなんだか恥ずかしく思い、そんなことはとてもじゃないがアームにはいえなかったのだ。

ラックスは口をパクパクさせていると、

「それになんですか？」

とアームは再び聞いてきた。ラックスは咄嗟に思いついたことを話

すのだった。

「それに・・・アームの魔術はなにに属するのかなっと思っただけだよ。」

「・・・・・・・・。」

ごまかせたかな・・・。内心ラックスはひやひやしながらアームの様子を伺った。

「ごめんな。変なこと言い出して。」

「いいえ。」

この地で魔の力が使えるものは属性によって分けられている。天・地・炎・水・光・闇・・・属性によつて扱える魔の力がまた違い、属性の種類は多数で未だにまだ知られていない属性があるが知っている者は数少ない。中には禁忌にも値する属性もある。属性は誕生直後に身体が輝くという。属性はその時に光の色、波動で検討され、輝かぬ者は属性に値しず魔の力も扱えないのだ。

（普通の人間の方が幾分幸せなのかもしれない・・・。私達のように魔の力が使えるものがあるから争いが耐えないんだ・・・。）
魔の力がないものは力のあるものに制圧され、奴隷のような扱いをさせられ命を簡単に奪う。みんなただ幸せに静かに暮らしたいだけなのに。ラックスの祖国がいい例だった。戦いのない世界に・・・とラックスは歩き出したわけだが・・・。

ふと疑問を感じたラックスはアームの横顔をちらつと見る。

なぜ、アームは仲間になつてくれたのだろう・・・。

視線を感じたのかアームがこっちを向いたのでラックスは背を向けて寝そべり返した。

そりゃあ、仲間になつてほしかったのは事実だ。でも・・・。

アームは背を向けたラックスに近づき耳元で顔を近づけ、

「どうしました？」

ガバッ

ラックスはアームの近すぎる声に驚き飛び起きた。それもそうだ。

だれだつて耳元で囁かれたらびっくりするに決まっている。まして

や不意をついてだ。

ラックスの反応を楽しんでるかのようになり、アームは微笑んでいた。

「やはりあなたは可愛い人ですね。」

「……怒。」

ラックスはアームの行動に腹を立てた。極めつけは可愛いときたもんだ。

ますますラックスの機嫌が悪くなり怒り出す。

「急に耳元で囁くな!!!後!!!子供だからってなめるなよ!!!」

「!」

アームはラックスのそばに立ち上がり腕をつかむ。

「私はあなたを子ども扱いした覚えはありませんよ。」

「じゃあ、なんだよ。今の行動は。」

ラックスの質問にアームは即答するのだった。

「だってラックス。あなたの反応は初々しいから。見てて飽きないんですよ。」

「俺はお前のおもちゃか!!!」

「さあね。」

アームの返事にラックスはあきれ、また寝そべる。アームは横でくすくす笑っていた。

わけわからん、こいつ。

そう思いながら目を瞑っているといつの間にか私の旅の始まりだった頃を思い出した。

第四章（後書き）

読んでいただきありがとうございます
また遅くなりまして申し訳ございません。
今後地道にがんばって生きていたいと思います

第五章

着慣れない礼服を纏い、ラックスはレピュータの待つ最上階の神間の間へと急ぐ。

「あー。．．．緊張するな。」

ラックスは深い溜息を出していた。この頃の私は祖国から離れて三月がたっていた。

そして満月の夜。神の力で未来を神託するレピュータにお呼び出しがかかっていた。

私にとってレピュータ様は暖かな雰囲気を持ち、慈愛に満ちたまるで聖母マリアの様な大切なお方だった。

「あー。どきどきする。」

ラックスは神間の間に辿り着くとろろろ門の前で歩き出した。

（．．．．．そういえば、レピュータ様と会うのは久しぶりだな．．．）

そう思うと余計に緊張して体がぎくしゃくするのだった。

ラックスはしやがみ込むとまた溜息を付き、考え込んだ。
がばっ

「うわっ。」

ラックスの背中からだれかが抱き付いてきた。

ラックスは重みに耐え切れず前へと倒れこんでしまった。

「なあに、溜息ばかり出しているんだ？」

抱き付いてきたのはカインだった。ラックスはカインの方にゆっくりと振り返りながら、

「カーイン．．．びっくりするだろ、どけっ。」

「やだね。」

「怒。」

ラックスはカインの腕を掴み解こうとするがそうはいくかとカインはぎゅっと腕に力が入る。

「重いつ！！！」

ラックスは身動きがとれず、カインに退くように言うがカインには退くような様子はまったくなかった。

「カイン……。そこら辺に女がゴロゴロしてるんだ。そいつらにかまってもええよ。」

カインはうーんと考えるが不敵な笑みを浮かべ、

「やだね、そこら辺の女よりお前をからかう方がおもしろいしね。」
むかつ

ラックスはカインの方をギロツと睨むがカインはびくともしなかった。

「俺は今、お前みたいに暇じゃないんだよ。」

「そりゃあ、俺も同じだ。」
むかつ

つてむかついてる場合じゃない。早く行かなければ。

ラックスは人差し指を出し、
「あ！！！！！！！！レピュータ様！！！！！！」

「なに！？」

カインはラックスの叫び声と同時に瞬時に体制を整え、軽薄男から紳士にへと早代わりをした。ラックスはその隙に立ち上がりそんな変貌振りのカインに向かって、

「この二重人格者……。」

「……失礼な。つてどこにもレピュータ様なんていないじゃないか。」

「お前の冗談に構ってられるか……。」

「冷たい……。」

カインはラックスの言葉に深い溜息をつくと座り込んでしまった。

「はあ。」

何度も溜息を出すカインに半ばあきれながらもラックスは、

「ほら……。」

ラックスは座り込んだカインを見て手を差し伸べるのだった。その

行為にカインは噴出す。

「本当に・・・優しいな。ラックスは・・・でも。」

カインは差し出された手を掴むと思いつきりラックスを引き寄せ、
「うわっ。」

ラックスはカインの上に倒れた。カインは薄笑いをしながらラックスに囁く。

「油断大敵ってね。」

カインはにこにこしている。

こいつはー。っと思いつながらもラックスは立ち上がる。
体についた埃を払い、カインも続くように立ち上がる。

「ところで、何でお前がここにいるんだ？」

ラックスはカインに聞くと、

「あつそうそう、レピュータ様にお前を連れてくるようにつたね。」

「だったら・・・。」

ラックスはカインの方に近づき、

「手間を取らせるなよ、まったく。」

「はい。はい。」

ラックスは改めて門の前に立つ。カインのおかげ・・・と思いたくはなかったがさつきよりは緊張感がなくなっていた。でもやっぱり・・・。

ラックスの浮かぬ表情にカインは声を掛ける。

「どうしたんだ？」

「別に・・・。」

その反応にカインは何かを悟った。

「はっはぁーん。さてはお前・・・緊張してんのか。」

「なっ！！」

ラックスはカインの方を見ると反論しようとするがこいつに何を言ってもきりがないことを思い出す。ラックスは再び気持ちを入れなおして門の前に向き門に触れるが押そうとはしない。

「・・・・・・・・」

カインは相変わらずよこでにやにやしている。また何を言われるかわからない。言われないうちにラックスは意を決して門を押し開いた。

ぎぎっー。

門は音をたて開きだす。ラックスは深呼吸をすると神間の中へと入っていった。

中は白く広々としている。とても宮殿の中とは思えないくらいだった。中へ中へと進んでいくと一人の女性が立ってラックス達を待っていた。

パールブルーの長い綺麗な髪をたなびかせ、淡いグリーンの瞳を持つ。その瞳にはどこか儂く寂しげなものを感じさせた。

暖かい力を感じる。やはり・・・この人の近くにいと安心できる。レピュータはラックスの姿を確認すると微笑んだ。

「ラックス・・・少し見ないうちに強くなりましたね。」

ラックスはレピュータの微笑に頬を赤らめながらも返答する。

「レピュータ様。お久しぶりです。」

返答はできたがまだラックスの緊張は解けないようだった。

「カイン・・・連れてきてくれてありがとうございます。」

「いえ、気になさらないください。レピュータ様。」

カインの微笑を見てラックスは背筋に寒気がするのを感じた。

「ありがとうございます。あなたには苦勞ばかり掛けていますね。」

「これが私が選んだ道です。だからレピュータ様は御自分の体を大切にしてください。」

「わかりました。」

カインとレピュータの会話を聞きながらラックスの寒気は収まらなかった。その原因は・・・。

ラックスはちらつとカインの方を見た。整った横顔と優雅な振舞い方、高貴な者かと思われるくらいカインの変貌振りに常々ラックスはあきれていた。さっきまでの言葉づかいと雰囲気と比べると同じやつなのかと疑ってしまいうくらいだった。自分の耳を疑ってしまう。

恐るべし……二重人格。レピュータ様は気づいているのだろうか……。

その容姿と言葉使いでどれだけの女を泣かせたのだろうか。女の敵だ。

「ラックス。」

「えっあつ、はい。」

急にレピュータに呼ばれ我にかえる。

「今日は呼び出してすみません。」

「いいえ、それで何でしょうか？」

レピュータはラックスを見つめる。レピュータの表情はさつきと違って深刻な顔付きになった。レピュータは重い口調で一言一言呟いた。

「できれば……あなたには戦ってほしくはなかった……。あなたには普通の……幸せを……。送ってほしかった……。神はなぜあなたに力を与えたのか……。私は……私は、あなたに戦ってほしくはありません……。」

「レピュータ様……。」

レピュータの言葉に辺りは沈黙となった。レピュータの悲しみの表情にラックスは笑顔を向ける。

「レピュータ様。私の気持ちを救ってくれたのはあなたです。あの時私はあなたに会っていなかったら私の心は死に……。人を信じる心を失うところでした。」

「……。」

「レピュータ様。私は今の自分を後悔してはいません。いえ、あの時の様にもう二度と後悔はしたくないのです……。私のこの呪われし力が人々の助けとなるのなら……。レピュータ様。」

そう、最初からなんとなく気づいていた。遂に来たのだ。この時が……。私の……。

私たちの仲間を探し帝国を倒す時が……。レピュータは深い溜息を付くと、

「……そうですね。あなたにはわかっていたのですね。」
そして手を出し水晶を掲げると一人の男が映し出された。

「……この者を仲間……私達に力を貸して欲しいのです。」

「……。」

水晶に映し出された男はにこにこしていた。

「この男ですか？」

「はい。」

「このへらへらした人ですか？」

「……見た目はこうでも中身はしっかりした人ですよ。彼は。」
ラックスは考えていた。外見で決め付けるのもなんだがなんかとて
も力があるとは思えない……。ましてや便りにしてもいいものか
考えたがどうこういつている場合じゃない。それは自分の目で確か
めて考えればいいことだ。

「わかりました。」

「ラックス。」

ラックスはレピュータを見つめる。レピュータの顔はまだ悲しみに
溢れていた。

「この者を仲間にし、あなたの信じる友を探しなさい。時が来たそ
の時あなた方は悟るでしょう。」

「……。」

「この者はフリーユータ様の……ラックス……あなたの力ともなる
でしょう。」

「え……。」

レピュータは目を瞑る。

「あなたにとってこの旅は過酷なものとなるでしょう。それでも……
行きますか？」

ラックスは笑顔でレピュータに答えた。

「はい。」

レピュータの目は開く。そしていつかは悲しみもどこかに消え、凜

々しい表情になっていた。

「ではお行きなさい。あなたの信じる道を。」

ラックスは一礼するとレピュータとカインに背を向け歩き出す。レピュータはいつまでも見続けていた。

「あなたの行く末に幸運があらんことを。」

そう一言レピュータは呟いた。

暖かい光が遠のいていく。宮殿の入り口についたラックスは上を見上げた。

高く聳え立つ宮殿。もうしばらくは見納めになるのだと目に焼き付ける。

「ラックス。」

ラックスの呼び声に向くと宮殿からカインが追いかけてきた。

「どうしたんだ？カイン。」

「いや、別に。」

「……？あいかかわらず、おかしなやつ。あつそうだ、カインには感謝しているよ。剣の扱い方を教えてもらったからな。」

ラックスはカインに微笑む。

「いや、教えるも何も、ラックスの場合、教える必要もなかったけどね。」

カインはラックスのあどけない笑顔を見ながら、

「寂しくなるな……お前としばらく会えないと思うと……。」

ラックスはその言葉に噴出す。

「よく言うね。どうせ、からかう相手がいなくなるからだろう。」

「あつばれた？」

ラックスとカインは何気ない会話に笑顔がこぼれる。

ラックスは手を差し出し、カインは手を取り、握手を交わす。

「じゃあね。」

「ああ。」

ラックスは手を離し、荷物を背負い込む。ラックスはカインを背に歩き出そうとすると、

「ラックス。」

「ん？」

カインはラックスの腕をひっぱりおでこにキスをした。その行動にラックスは呆然とする。

「……………」

カインは満足な笑顔をし、

「せんべつ。」

と言うと宮殿の方へと歩き出した。

「………… お前は、怒。だれかれかまわずかまつのやめる!!」

ラックスの言葉に振り返ることなく、

「残念、俺は女しか興味ないんでね。」

「遊び人。」

カインは歩き続け手を振る。あいつはあーゆうやつだ。からかって反応を楽しむ。

「ラックス。」

カインは振り返り大きな声で、

「俺みたいになるなよ!!!」

「なるか!!!!」

即答でラックスは叫ぶ。カインは笑いながら宮殿の中へと入っていた。

「へんなやつ。」

ラックスはそう言うと森の入り口へと歩き出した。

第六章

遠くで声が聞こえる。聞き覚えのある声。

「・・・ス。・・・ラックス。もしもし。」

重い瞼を開けるとそこにはアームが顔を覗かせていた。

「ん？」

ラックスはいつの間にか寝てしまったことに気付く。

（ん？でもなんで？草原で寝ていたはずなのに景色が違っんだ？）

ラックスは周囲を見た。

「どうしました？」

「おい。」

ラックスは自分の状況をやっと把握した。アームに抱きかかえられたのだ。

「なにやってるんだ。」

アームはニコニコしながら、

「いやぁ気持ちよく寝ているものですから起こしては悪いし、かといってあの場で起きるのを待っていては日が暮れるので・・・。」

「わかったからおろせ。」

アームは不満そうな顔をしながらしぶしぶラックスをおろした。

「今度からは頼むから起こしてくれ。」

ラックスは頭を抱え込む。

「なあ」

「はい？」

ラックスは身なりを整えながら、

「寝てる時・・・なんかいつてたか？」

「・・・何を？」

「なにをってだから・・・。」

「ああ・・・内緒です。」

アームの不敵な笑みにむかっさせながらも、問い詰めてもこいつ

の場合いわないだろうな。とラックスは思い諦めた。深いため息を出したときアームの足に目が入る。

「お前ずつとあるいていたのか？」

「はい。そうですが。」

アームの足はちゃんと地面に着いていた。てつきりうかびながら移動していたのかと思っていた。ラックスは驚いた。

「馬鹿かお前は。」

ラックスはアームに向かいあう。

「そんな時に敵に襲われたらどうするんだ。」

「……………」

ラックスは自分の言葉にはっとする。

「ごめん。アーム……………」

「いえ。」

アームはラックスの頭をなでながら

「あなたの可愛らしい寝顔を見ていたので大丈夫ですよ。それに私はそこまで弱くありません。」

「……………可愛いは余計だろ……………」

「本当のことです。」

アームの言葉にまた深いため息を出す。そう言えばそことなくカインに似ている。

夢の中まででてくるとは……………今回だけにしてほしいものだ。

「ザイアステイがみえてきましたよ。」

アームの言葉にラックスは周囲を見渡す。目的の場所へと着いたことに気付いた。

辺りはもう夕焼けで町の明かりがやたらまぶしく見える。

「アーム。」

ラックスはアームの体力の心配もあり体を休めようと先を急いだ。

アームが遅いので腕をつかみ町の中へと入っていく中、宿を探した。

「そんなに慌てなくても夜は長いですよ。」

「ばっ!!!!!!!!!!!!!!?」

ラックスは真っ赤になってしまった。

「あれ？私は時間がたっぷりあるからゆっくり探しましょう。とい
つたんですよ。どうして真っ赤になるんですか？」

「お前は……。」

またアームにからかわれたことを知りラックスは腹を立たせた。

だが俺が怒ってもきつとまた反応を楽しむに決まっている。ラックスは成す術もなく宿を探すことを続けた。その様子にアームは残念そうな表情になっているのだった。

第六章（後書き）

遅れてすいませんでした（ノー・。）クスン

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n2025a/>

華永伝

2010年10月22日00時26分発行